

平成29年度 学力向上アクションプラン

1 中期学校経営方針

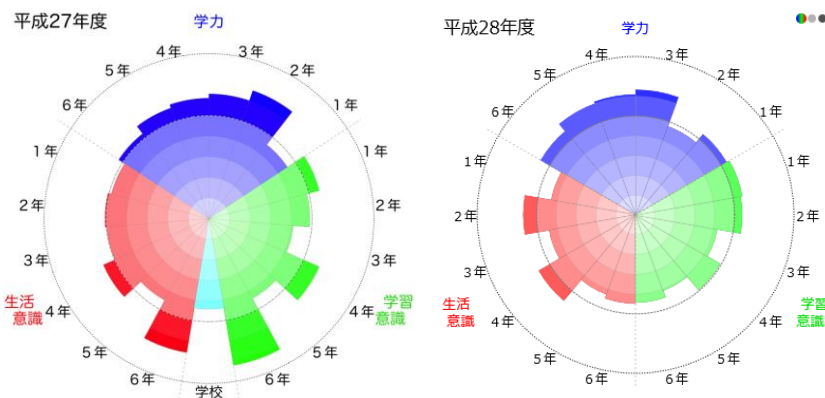
(1) 学校経営中期取組目標

学校経営中期取組目標
◎学校教育目標の実現に向け、魅力・活気にあふれた学校をめざします。
○わかったときの喜び、できたときの充実感を味わい、自己肯定力を高めることができる教育活動に取り組めます。
○誰もが安全安心に過ごせる学校をめざし、教職員一人一人が学校経営に参画する意識の向上を図ります。
○保護者や地域と連携し、まちとともに歩む学校づくりをめざします。

(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

重点取組分野	取組目標	具体的取組
確かな学力	日々の授業を充実させ、わかる授業・活用する授業を行い、一人ひとりがいきいきと活動できる場や、個の実態にあった学習を行う。	①少人数指導や教科担任制の部分的な取り入れなど学習の形態を工夫し、学習意欲の向上を図る。 ②指導の系統性を意識し、既習学習を活かして新たな課題解決を図る力を育てる。 ③日々の学習の中で、互いの思いを共感しながら聞き、自分の思いを素直に話す態度を育てる。
担当	評価委員会	

2 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握



(1) 学力の概要と要因の分析

学力は全体的にほぼ平均を上回っている。生活意識と学習意識の高さには相関関係があることも読み取れる。学習面では、どの教科も平均正答率に達している部分が多く、特に基礎・基本の観点での得点率が高い。普段の授業で「基礎・基本」の定着を図るために、導入の工夫やスキル学習に繰り返し取り組んできたことや、宿題等家庭学習の定着によると考えられる。

(2) 教科学習の状況

国語：各学年ほぼ市平均前後の結果。学年が上がると特に「話すこと・読むこと」の通過率が高い。
算数：各学年ほぼ市平均を上回り、1、4年は特に「数学的な考え方」で平均を大きく上回った。
社会：「知識・理解」がやや低い学年もあるが、どの観点でも各学年概ね市平均を上回った。
理科：各学年ほぼすべての観点で市平均に対し、高い結果である。特に「思考・表現」が高い。

(3) 経年変化の状況と要因の分析(学習・生活意識調査も含めて分析)

得点ではどの学年も平均を上回っていることは、毎年継続している。しかし、学習意識は全校的に学年が上がるにつれて下がってきている傾向がある。

生活意識との相関を見てみると、特に「話したり聞いたりして人と関わることが好きですか」「物事を最後までやりとげてうれしかったことはありますか」の項目が低くなってきている。学校生活で見られる子どもの課題が、この調査の数値としても表れた。学力層をみると、すべての教科でA層の児童の割合が市平均を上回り、D層は少ない。だが、各教科で「勉強は好き」と答える児童の割合は低い。3年と5年で学習意識が低くなるのは、新しいことになじみにくく、手厚さを求める本校児童の特徴が表れていると考える。「社会」「理科」「総合」が3年から。3、4年で少人数指導だった算数が、5年生では、一斉授業の体制になる。また、図工が専科教諭による授業の体制でなくなる

一方「自分にはよいところがあると思う」と答えている児童の割合は、平均を上回っている。この状況から、与えられた問題に取り組む基礎基本を身に付けるという授業スタイルだけでなく、児童の興味関心に寄り添い、そこから課題を解決していき充実感を得ることのできる学習課程の構築の工夫をすることの必要性がある。

3 平成29年度 学年・教科等としての具体的取組

目標 自他を深く見つめ 豊かなかかわり合いの中で、
よりよい生き方をめざそうとする子の育成

ア 研究・研修の充実

○教材研究の充実

・学年研究の時間を確保することで、一部教科担任制の実施も視野に入れ教材研究を深め、指導方法や内容について学年で共通理解を図り、新しい実践にも果敢に取り組むようにする。

○研究授業の充実

・重点研・初任研・示範授業・二・三年次研修などで授業研究を実施し、授業作りに研鑽を積む。
・初任者・二・三年次の教員を中心にしたメンターチームを定期的に開催し、実践的な授業研究を行う。

○重点研の充実【平成29年度 道徳】

イ 自分の考えを伝え合う授業の充実

○言語活動の充実

・市教育委員会の資料「言語活動サポートブック」等を活用し、全教育活動で意図的に言語活動の充実を図る。
・水曜日の読書活動や金曜日の読書ボランティア「ひまわり」による読み聞かせなど、読書活動の充実を図る。

○個に応じた指導の充実

・一人ひとりの生活態度や学習状況・学習能力について、教師自身の観察記録などから情報収集する。
・3・4年生の算数では、学級を二分した少人数の授業形態で、一人ひとりの課題解決を丁寧に支援する。
・特別支援教育の充実を図り、指導の共通理解と児童のニーズに合った支援を行う。

ウ 学校と家庭・地域との連携

○学校評価の充実

・授業参観やまちとともに歩む懇話会などで寄せられた評価等を参考にし、教育活動のPDCAに活かす。

○各教科の評価規準の明確化

・全教科の評価規準を検証し、指導と評価の一体化と共に、児童の振り返り活動の充実を図る。

・9年間を見通した小中一貫カリキュラム検証や小中の連携を強化し、その様子を家庭地域へ発信する

平成28年度横浜市学力学習状況調査 各学年の分析

1年生

・国語、算数ともに市の平均と比べて正答率が高い。正答率別の分布をみると、国語は、ほぼ正規分布だが、算数は上位に偏っており、下位に教人数散見している。今後、その下位の児童の学力を底上げしていくことが重要課題といえる。

観点で見ると、国語の「読み」と算数の「数学的な考え方」がよいということは、文章や図の意味を理解する能力に長け、課題を解決する能力が身に付いているといえる。しかし、「聞く」ことが苦手ということが分かった。意識調査をみると、「学校の授業は分かりやすいか」という設問では、市よりも30ポイント高い。教科では国語も算数も「よく分かる」という回答率が市の平均より10ポイント高い。以上のことから、今年度の1年生は、話を聞くことが苦手だが授業は分かりやすいと言っている。授業は、図や表を効果的に使って視覚的に分かりやすい工夫をした授業が有効であったといえるであろう。

4年生

・国語では、「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域については、市の平均を大きく上回っていた。聞き書き問題では、学級数の中で提案理由を確実に聞き取ることや司会の進め方のよさに気付くことができた。大切なことは何かを考えながら聞くことができていたといえる。言語では、漢語辞典を利用して語句を調べる方法やいろいろな意味を持つ言葉の理解がよくできていた。「書くこと」「読むこと」の領域では、平均をわずかに上回る結果となった。しかし、目的や必要に応じて文章を書くことや要約する力に課題が見られた。目的意識をもって書いて読みだりできるように、授業の準備工夫することが大切である。

・社会の「技能」「思考・判断・表現」の観点では、市の通過率を上回っていた。消防署、神奈川県警察本部、資源循環局、吉田新田など、たくさんのお客さんを見学を通して、実際に施設の様子を見たり、話を詳しく聞いたりしたことが、考えを深めることにつながったといえる。「知識・理解」については、市の平均を若干下回った。まちを守る消防団の役割、神奈川県市町村の特色についての理解に課題があった。実際に見学できないことについては、教科書や資料集だけでなく、よりよい資料や映像を活用するなど、知識が身に付くような工夫をしていく必要がある。

・算数では、「技能」「知識・理解」「数学的な考え方」のすべての観点について、市の通過率を大きく上回っていた。とくに、考え方や活用能力は、10ポイント上回る結果となった。普段から学習したことを生活に生かす姿勢が見られることや、少人数指導の中で多くの児童が自分の言葉で考え方を説明させる機会をつくったことがよい結果につながったと考えられる。「量と測定」領域は、ほかの領域に比べてやや苦手といえる。分度器を用いて角の大きさを測定する問題や与えられた図形と同じ面積の図形を選択する問題につきまつきが見られた。授業の中で実際に図形を作る時間をさらに多く取り入れていくことが必要であるといえる。四則の混合した式や()を用いた式についての理解も、さらに深めていく必要がある。

・理科の「思考・表現」「技能」の観点では、市の通過率よりも非常に高い結果となった。とくに、【金属、水、空気と温度】領域の「技能」は18ポイントも高かった。理科支援員による授業準備の補助があったため、予想を立てる時間をしっかりと取ることができ、目的意識をもった実験に取り組むことができた結果といえる。「電気の働き」の領域に多少課題が見られた。電気の流れ方について考えたことと表した図を選択する問題につきまつきが見られた。電気は目に見えないものであるが、それを矢印やなどの簡単な図で表現させる指導をしていくことも大切である。予想、結果、考察を自分でもめる力をさらにつけていく必要があるといえる。

2年生

・国語では、漢字の読み書きはよくできていた。読みは98%、書き取りは90%以上の児童が正答することができた。日々の授業やドリル、プリントなどでの継続学習の成果が表れている。読む力をみる問題では、文章の内容を自分の経験と結び付けて考える問題、文章の中の大事な言葉を書きぬく問題など、活用問題がよくできていた。毎日の音読学習や読書に慣れ親しんでいる成果であると感じている。文中で助詞を正しく使う問題や、かぎ「」の使い方を理解して文章の中で使う問題の正答率は、市の平均を少し下回った。また、書くことの活用で、観察メモを見ながら、条件に合わせて文を書く問題では、市の平均を10ポイント下回った。日頃からの書く機会を多くし、文を書くことに親しんできたが、細かいところまで気を配って書いたり、書いた文をしっかりと読み返したりすることに力を入れていきたい。

・算数では、繰り上がりのあるたし算、かけ算九九、長さの測定、グラフの作成など、技能をみる問題については、90%以上の児童が正答することができた。日々の授業やドリル学習などで、基礎・基本の定着を大切にできた結果であると感じる。全体的に、基礎・基本の力をみる問題の方が正答率が高いが、活用問題でも、乘法を用いて全体の数を効率よく求める方法を考える問題や、長さや水のたかさの量について、普通単位を用いて表すことよさを考える問題がよくできていた。具体物や半具体物を使って考える授業を大切にできたことであると思う。しかしながら、活用問題6問中4問で市の平均をやや下回ってしまった。今後「関連付けて考える力」や「根拠を明らかにして説明する力」をつけていくために、図や表、グラフなどを用いて自分の考えを表現する機会を増やしていきたいと考える。

5年生

・国語の「話すこと・聞くこと」「言語」「書くこと」「読むこと」の4領域ともに市平均を上回ることができた。特に「書く能力」「読む能力」は昨年と比べ、昨年比10%以上伸びた。「書く能力」は、作文指導や考えをノートに書くなどの活動の成果だと考えられる。「読む能力」は、説明文においては筆者の伝えたいことを物語文においては登場人物の心情を文脈に即して読み取ることもしっかりとやってきた成果だと考えられる。市平均を上回ったのは、書え、問われていることに対して適切にこたえる力にまだ低く、「○○という言葉を使って解答する」と求められているのに使っていないものが多かった。授業において、考える視点や表現する視点をより明確にする必要性を感じた。

・社会では、「技能」「知識・理解」「思考・判断・表現」の3領域ともに市平均を上回ることができた。領域別で見ても、全領域において市平均を上回り、定着率の低い領域は特にない。特に「工業」の領域は、大きく市平均を上回った。本年度は日産自動車工場見学を2月に行った。工業の学習の時間が終わって見学に行くことになったが、それが学習の定着に少しマイナスにはなっていないと感じた。容易い問題は解けるが、難易度が少し上がり問題の意図が掴めないという課題にできなかった。国語同様、問題文を理解する力が必要だと感じた。

・算数では、「技能」「知識・理解」「数学的な考え方」とともに市平均をやや上回った。小数の計算における余りの求め方など、基本的な計算で定着を固れていないものがある。市平均を上回っているが、反復練習をしっかりとやり、定着を図りたい。『矢印を書く』『見直しはもう一度検算をして行う』など、手を抜かなければできると多い。全体正答率40%以上の児童が約20%いる。4教科で1番下位の児童が多い。これらの児童は、習熟度別で、活用よりも基礎・基本の定着に重点を置いて指導する方がよいかもしいない。

・理科では「技能」がやや市平均を下回り、「知識・理解」は市平均をやや上回り、「思考・判断・表現」は市平均を大きく上回った。極端にできる領域もできない領域もないが、「天気の変化」「動物の誕生」がややよい。「技能」「知識・理解」は昨年度と比べ市平均に対し成績が落ちている。昨年は理科専科を効果的に活用できていたようなので、来年度は理科の指導の在り方も考えるべきと思う。正答率が低かったものには、実験でしっかりと指導していないものがあった(振り子の実験の際、最初2〜3回は記録にきまらなかった)。担任が理科支援員と協力して、実験の仕方をしっかりと指導していればよかった。

3年生

・国語では、「話すこと・聞くこと」「言語」「書くこと」「読むこと」の4領域ともに市平均を上回った。「話すこと・聞くこと」については、話の中心を意識して取り組んでいた。朝の会帰りの会をはじめとして、日常生活で多様な言語活動を設定したことが効果的だったと考える。「読むこと」については、叙述に即して筆者の主張を読み取ったり、登場人物の心情を考えたりしていた。日頃からの学習指導をより充実させていきたい。問題文の読み取りがやや粗雑である点が指摘される。内容自体は読解できているものの、回答する登場人物を間違えて書いたりした誤答が多くあった。どの学習活動においても、何を求められているかをより意識させる指導の必要性を感じた。

・社会では、「技能」「知識・理解」「思考・判断・表現」の3領域ともに市平均を上回った。領域別で見ても、全領域において市平均を上回り、定着率の低い領域は特にない。今年度は、またたんけんや工場見学など体験を通して学ぶ活動が多く、実感をもって知識理解や思考判断に繋げていくことができた。児童の実態に照らしても、そのような学習形態が有用だったといえる。後半の資料読解で失点が見られた。丁寧に資料を読むよう指導していきたい。

・算数では、「技能」「知識・理解」「数学的な考え方」とともに市平均を上回った。基本的な学習内容は多くの児童が押さえられていて、「図形」領域の思考を問う問題では、市平均を下回った。形のとらえが苦手で、はじめから諦めてしまった児童も少なくない。まずは、例に沿って、実際の形を描いていくことで、問題が組み立てられていることを捉えることが重要である。それまでの既習事項とも組み合わせながら、知識理解の活用のしかたを児童に指導する必要性を感じた。

・理科では、「技能」は市平均をやや上回り、「技能」「思考・表現」は、市平均を10パーセント以上上回っている。後者2領域のうち、特に「光の性質」「電気の通り道」「風や土の働き」の単元がよい。実験を通して楽しく学習したことが、しっかりと知識として身に付いていた。また、予想しながら考えることで、思考力の強化にも繋がっていると考えられる。問題文中の例を参照せずに回答したため、理解はしていても誤答となったものがある。他教科に比べても言えるが、問題文をしっかり読むことを指導していきたい。

6年生

・国語の「話すこと・聞くこと」「読むこと」の領域については、市の平均を上回っていた。話し合いの中で発言者の意図をえらえながら意見を聞くことや、説明文の書き手の立場や考え方に注意して読むことがよくできていた。「言語」「書くこと」の領域では、平均をやや下回る結果となった。特に既習の漢字を正しく使うことや、事実と感想を区別しながら、目的に応じて文を書くことなどを、意識して学習していく必要性を感じた。

・社会では、全体的には市の通過率をやや上回る結果となった。「技能」の観点では、特に歴史分野において、年表や資料から読み取ることができていた。また事実に対して、その起こった理由や影響について考えることもよくできていた。歴史や政治における「知識・理解」については、市の平均をやや下回った。米づくりが始まったころの時代の様子や、室町文化・戦後の日本の復興の様子が興味深いなど、基礎・基本の知識の定着には課題が見られた。また、歴史と政治の分野別に見たとき、歴史は平均を上回っているのに対し、政治の問題だと誤答が多いことから考えると、単元ごとの配分にも気を付けて学習を進め、理解を深めていくことも重要であると考える。

・算数は、市の通過率と比べると概ね本校のほうが高い結果となった。「数」と計算「図形」「数量関係」の3領域については、市の平均を上回っていた。特に、分数量の計算や、拡大図をかく問題においては平均を大幅に上回っており、計算の仕方を確認したり、実際に拡大図や縮図をかいたりする学習活動も多く取り組んできた結果と考えられる。一方、「量と測定」については、市の平均をやや下回った。特に、半円の求積問題で必要な数値を読み取ることや、角柱の求積に必要な底面積や高さを選択することで失点が目立った。今後は、学習活動における、演習問題を通しての理解の深まりを重視していくことが必要である。

・理科も、市の通過率と比べると概ね本校のほうが高い結果となった。特に、【この規則性】「水溶液の性質」の領域では、市の平均を大きく上回っており、学習活動の中で、実験をしっかりと行うことで、理解を深めていくことができたと考えられる。唯一、平均を下回ったのが【大地のつくりと変化】における「思考・表現」であり、少し難題であったこともあるが、地層の成り方の理解と問題の特徴をつかむことが課題として考えられる。今後は、科学的な思考・表現の活用問題に取り組む必要があると考えられる。